

## 『平家物語』の「かたり」表現ノート

村 上 學

一

与一、鎬をとつてつがひ、よつびいてひやうどはなつ。小兵といふぢやう、十二束三ぶせ、弓はつよし、浦ひびく程なになりして、あやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりをいて、ひいふつとぞ射きつたる。鎬は海へ入れれば、扇は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に、一もみ二もみもまれて、海へざつとぞ散つたりける。夕日のか、やいたるに、みな紅の扇の日いだしたるが、しら浪のうへにたゞよひ、うきぬしづみぬゆられければ、奥には平家、ふなばたをた、いて感じたり。陸には源氏、ゑびらをた、いてどよめきけり。(高野本 「那須与一」末尾)

元暦二年二月十六日(新暦の三月二十七日)午後五時すぎ、あかあかと西の空を染めて黄金色に輝きながら瀬戸内海の嶋々の蔭に沈みゆく夕日を左に、与一の射た鎬矢に要際を射切られた扇は、その空と落日の情景を凝縮したかのような皆紅の地に黄金の日を描いた

ものであった。それは一揉み二揉みとひらめいてその夕日の光を散乱させつつ、折しも吹きつのである北風によってさわぎ立つ白波の上に落ち、暫し見え隠れに浮き漂う姿を見せつつ、鮮やかな色彩的コントラストを成して、今これを読むわれわれに強い印象を与えてやまない。「那須与一」の末尾、このクライマックスの主役は、扇を射おおせた那須与一ではなく、扇自体とさえ言えるのである。

なにも啓蒙的な鑑賞文を書こうとしているのではない。この鮮やかな印象が「皆紅の扇の日出したる」の句を「夕日のか、やいたる」と「白浪」との間に配列するという技法のもたらした集中性によって生じていること、それが覚一本の意図的な技法の一つであることに注目したいのである。この部分を屋代本と平仮名百二十句本、中院本の本文と比較すれば、そのことは明らかにする。

弓ハ勁シ、浦響程ニ鳴渡テ、扇ノ金目ヨリ上一寸計置テ、ヒフツト射切リタレバ、扇コラヘズ①三ニサケテ空ヘアガリ、風ニ一操モマレテ、海ヘザツトゾ散タリケル。②皆紅ノ扇ノ日出シタルガ、夕日ニ輝テ、白浪ノ上ニ浮ヌ又沈ヌユラレケレバ、：

……(屋代本)<sup>注一</sup>

ゆみはつよし、そらにひゞくほどになりわたりて、扇のなめよりうへ、一すんばかりおゐて、ひやうふつといきつたれば、あふぎこらへず、①三つにさけ、そらへあがり、かぜに一もみもまれて、海へざつとぞちりたりける。<sup>注二</sup>みなぐれないの扇の日いだしたるが、夕日にかゞやひて、しら浪のうへに、うきぬしづみぬゆられければ、……(平仮名百二十句本)<sup>注三</sup>

弓つよかりければ、うらひゞく程になりわたりて、あふぎのかなめより、上一寸ばかりをいて、ひふつといきりたれば、あふぎこらへず、①三にさけてそらへあがり、風に一もみ二もみもまれて、うみへざとぞちりたりける。<sup>注四</sup>皆くれないのあふぎの、ゆふ日にか、やきて、なみにうきてゆられけるを見て、をきには平家、ふなばたをた、いてをめきたり、……(中院本)<sup>注四</sup>

これら三本では共通して、①扇が三つに裂ける。それは空と夕日の象徴として一つに凝縮する表現にはなりえない。②皆紅の扇、夕日、白浪の順となっている。この順では論理上、扇の動きが前面に出て、その絵柄が空と夕日の凝縮表現とはならず単に夕日に映えるだけと読め、かつ紅白の色彩対比の効果は夕日の句を挟んで離れているだけ弱い。すなわちこれら三本では叙述の重心は那須与一の美技にあつて、感覚的な効果には注意を払っていないと読める。その絵画的性格の後退は中院本では引用末尾の「波に浮きて揺られけ」という省略傾向にある一文の存在によりさらに一步を「しりぞ

いて」いるようだ。しからば、この三本は感覚的效果に注意を全く払っていないのか。そのように短絡するのはまた誤りである。誤りである証拠は、左の文章にある。

舟のうちより、よはひ十八九ばかりなる女房の、まことにうにうつくしきが、柳のいつ、ぎぬにくれなるのはかまきて、みな紅の扇の日いだしたるを、舟のせがいにさみたて、陸へむひてぞまねひたる。(高野本)

船ノ内ヨリ、赤キ袴ニ柳五衣着タル女ノ実ニ優ナリケルガ出テ、皆紅ノ扇ノ日出シタルヲ舷ニハサミ立テ、陸ヘ向テゾ招キケル。(屋代本)

あかきはかまに、柳のいつ、ぎぬきたるおんなの、まことにゆうなりけるが、せんちうよりいで、みなぐれないの扇のひいだしたるを、ふなばたにはさみたて、くがへむかひてぞまねきける。(百二十句本)

舟の中より、あかきはかまに、やなぎの五きぬきたる、女房の、十七八に見えて、まことにいうなるが、みなぐれないのあふぎの、つまに日いだしたるを、舟のせがいにさみつ、くがへむけてぞまねきたる。(中院本)

中院本に「つまに」なる説明的な一句が付け加わっているほかは、この三本とも全て同文の傍線部「皆紅の扇の日出したる」の一句を有する。そしてこの一句が、百二十句本を除いて先掲の諸本の本文に見られるように同じことばで再掲出されているのである。この同

文再掲出は、それが短い（三文節）だけに一見偶然、ないしは他の表現がないゆえの同文としてその意味が見過ごされ兼ねない。そうでないことは、いわゆる読み本系の本文、例えば四部合戦状本ならびに延慶本の本文と語り本本文との差異を比較すれば明らかである。

二月廿日比の事なるに、柳の五重に紅の袴着たる女房の、十七八に見ゆるが、紅の扇の月出だしたるを仕ひて、船の櫓の屋形に立ち出で、「源氏の兵、之を射よ」とて、扇を挟み立て、屋形の内へ入る。（中略）

根堀の鏑の十一束三伏を打咬せ、鏑の上を引き懸けて、且し持して放てば、長鳴りして、扇の鹿目の本を破他と射破りて、海へ雑とぞ射入れける。平家の方は船端を叩きて興に入る。源氏の方は箆を叩きて感じけり。時に取りては勇しき高名なり。紅の扇の月出したるが、夕日に輝きて海上に浮かびて面白かりければ、屋形の内より、五十計りなる男の……（四部合戦状本）<sup>注五</sup>

暫ク有テ、船中ヨリ齡廿計モヤ有ラントオボシテ、女房ノ柳裏ニ紅ノ袴キタルガ、皆紅ノ扇ノ月出シタルヲハサミテ、船ノ舳ニ立テ、是ヲ射ヨトオボシクテ、源氏ノ方ヲ招テ、持タル扇ニ指ヲサシテ、扇ヲセガヒニ立テ入ニケリ。（中略）

余一鏑取テハゲテ、十二束二伏ヲヨツ引テ、シバシカタメテ兵斗射タリ。浦ヒヅケト海ノ面ヲ遠鳴シテ、五六段ヲ射渡シ、扇ノ蚊目ハタトイテ、二ニザットゾサケニケル。一ハ海ニ入テ

『平家物語』の〈かたり〉表現ノート(村上)

波ニユラル。一ハ一丈計空へ上ル。折節風吹テ地ニモヲトサズ、ソラニ吹上テ舞遊ブ。平家ノ方ニハ（称賛ノ動作描写省略）、源氏ノ方ニハ（称賛ノ動作描写省略）夕日ニカ、ヤキテ波ノ上ニ落ケレバ、秋ノ嵐ニ龍田川ニ紅葉ノチリシクカトゾ覚ヘケル。敵モ御方モ是ヲ見テ、一同ニアットゾ云合ケル。（延慶本）<sup>注六</sup>

四部本も延慶本も扇は「紅の月出したる」絵柄である。おそらく銀箔で三日月か十三日ぐらいの月が押しであることになるのだろうが、誤写かこちらが原態なのかは不明であるものの、出の遅い二十日過ぎのことではあり、語り本の「日」と比べれば「月」はこの場には即応しないように見える。ただ四部本では銀色の月と黄金色の夕日とが対比的なものとして組合わされ、赤色の夕映えと紅地の扇という同質のものを取り合せの背景と対比されていると言う点で知的操作に傾いているものの、それなりに感覚的な効果を狙った描写となっていることは言えよう。そして扇の絵柄が予めこの挿話の冒頭で述べられ、享受者に既知の情報となっているからこそ、この対比は効果を發揮する。後の場面初めて絵柄が「紅に月出したる」ものだとの情報を与えられては、享受者はその情報の新奇さに眩まされ、抵抗されて、この場における絵柄の持つ意味を知的にも感覚的にも十全には把握できなくなる可能性があるのではないだろうか。いっぽう延慶本には初めに「皆紅ノ扇ノ月出シタル」の表現はあるが、後の場面には絵柄の明示的な描写を欠く。「龍田川ニ紅葉ノチリシク」とある描写は、扇の地が皆紅であることが享受者の既知

の知識となつてゐることを前提にしてなされたものであり、情報の無駄な提供(重複)を避けたものとよめる。そして「月」は後の場面では全く意味を持つていない。このことから四部本と延慶本と何れの描写が先行するかとか、「那須語り」が本文形成の前にあつたのか否かとか推測することはこの論にとつて生産的ではない。ここでは延慶本に文字による享受の持つ特性を前提にし、かつ感覺性を殆ど捨象した知的理解という方法が明確にあることを認めるにどめる。そこでは享受者は場面を対象Ⅱ〈他者〉として外側から明確に認知することが求められるのであつて、そこへ感情移入することは拒絶されているのである。そして四部本と比較してさえ、語り本の後の場面の印象的な形象——身体的な感覺性は、より明確な意図をもつて置かれてゐるものであることが知られる。予め何気ない振りをして与えられ、享受者の意識下に漠然としまわれていた「皆紅の扇の日出したる」という情報が、後の場面において鮮やかに感覺的な意味付けを与えられて全く同じことばで再登場し、意識の上に浮び上がらせられるその「浮上」作業。意識下での満足感を伴うことになるこの作業に、享受者が場面に感情移入し没入—合体化させられる仕掛けがある。その場面への没入こそ、へかたり(語りⅡ騙り)なる言語行為が成立する<sup>注七</sup>必須的前提であつたといえよう。そして、その同語句の繰り返し技法は一面の本質として、時間の一次的な線条性にに基づき、発生した次の瞬間には消え去り再びは戻つてこない音声という不確実な媒体による、かつ聴き手の問い返し・

たちどまりと反復を拒絶する一方通行的な情報伝達の方法——へかたりもの、ないしその疑似であればこそ、はじめてその有効性が十全に保障される仕掛けであつた。享受者が二次元的に立ち止まり、たち戻り、時には一覽的に、情報を主体の恣意をもつて把握する事が容易な、文字面を媒体とする情報伝達Ⅱ〈読み〉では、様式的にも同じい情報伝達の繰り返しは過剰であり無駄なのである。

右のように考えるとき、「那須与一」の場合いわゆる「語り本」のうちで享受方法を最も意識して整備されたテキストになつてゐるのが覚一本系であり、屋代本・百二十句本は未整備、中院本はむしろ文字面享受へと一步を踏み出しているといふうちおうの整理ができよう。ではそれはまだ一般に常識になつてゐるような琵琶法師の〈語り〉による本文成長の結果、ないしは語り技法の進展による本文変化なのであろうか。嘗てこのことをやはり同文を手懸りに巻七から九にかけて木曾義仲の説話について検証してみた。<sup>注八</sup>そこでは覚一本の表現は琵琶法師のネイティブ・ランゲージ的な〈語りことば〉により自然に成長発展したものではなく、その方法をノンネイティブな立場で意識的に利用して作成された、いわば〈疑似語り〉によるものだとした。そのベクトルを逆に延長拡大して、もし屋代本のテキスト形成が同文というネイティブ・ランゲージ技法のみによつて説明できるとするならば、それは短絡としか言ひようがない。同文は〈語りもの〉の一つの指標でしかない。しかも同文自体がノンネイティブに形成され得るものである。その多寡自体は無条件に

へかたりもの」であるか否かの指標とすることはできない。<sup>注九</sup>

二

以下やや性急な筆はこびとなる。

語り本卷十一の前半、「能登殿最期」までの同文を、屋代本・平仮名百二十句本・高野本について機械的に抽出してみると、量的にはあまり差がない。そのなかで最も量が多いのは高野本であり、最も少ないのが百二十句本であるが、その差はプリントアウトした用紙量でB4四枚と十一枚の差でしかない。しかしその性質については高野本と屋代本の間では顕著な差があるといえる。各本につき、長大なものからおおむね降順に一部を列挙し、その性格を考えてみたい。

★高野本

①判官、近藤六親家をめして、「八島には平家のせいいか程あるぞ」。「千騎にはよもすぎ候はじ」。「などすくなひぞ」。「かくのごとく四国の浦々島々に五十騎、百騎づ、さしをかれて候。其うへ阿波民部重能が嫡子田内左衛門教能は、河野四郎がめせどもまいらぬを攻めんとて、三千余騎で伊与へこえて候」。「さてはよいひまごさんなれ。是より八島へはいかほどの道ぞ」。「二日路で候」。「さらばかたきのきかぬさきによせよや」とて、……〔勝浦〕一六六頁四行）

八島には、阿波民部重能が嫡子、田内左衛門教能、河野四郎が

めせどもまいらぬをせめんとて、三千余騎で伊与へこえたりけるが、河野をばうちもらして、家子・郎等百五十余人が頸きつて、八島の内裏へまいらせたり。「内裏にて賊首の実検せらるん事、然るべからず」とて大臣殿の宿所にて実検せらる。百五十六人が首也。頸ども実検しける処に、……〔勝浦〕二六七頁一四行）

判官、志度の浦におりゐて、頸ども実検しておはしけるが、伊勢三郎義盛をめしての給ひけるは、「阿波民部重能が嫡子田内左衛門教能は、河野四郎道信がめせどもまいらぬをせめんとて、三千余騎にて伊与へこえたりけるが、河野をばうちもらして、家子・郎等百五十人が頸きつて、昨日八島の内裏へまいらせたりけるが、けふ是へつくときく。なんぢゆきむかつて、ともかうもこしらへて具してまいれかし」との給ひければ、……〔志度合戦〕二八一頁一二行）

cf 屋代本①、百廿句本①

②つゝゐて名のるは、後藤兵衛実基、子息の新兵衛基清、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武蔵坊弁慶と、声々に名のつて馳来る。「嗣信最期」二六九頁七行）

源氏の方にも心得て、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同四郎兵衛忠信、伊勢三郎義盛、源八広綱、江田源三、熊井太郎、武蔵坊弁慶などいふ一人当千の兵ども、われもくと馬のかしらをたて

ならべて、大將軍の矢おもてにふさがりければ、………〔嗣  
信最期〕二七一頁一行〕

ひさる程に伊勢三郎義盛、奥州佐藤四郎兵衛忠信、江田源三、  
熊井太郎、武藏坊弁慶などいふ、一人当千の兵共、やがて  
つゝゐて攻戦。(卷十二「土佐坊被斬」三五〇頁二行)

③今度はなかざしとつてうちくはせ、よつびいて、しやくびの骨  
をひやうふつと射て、ふなぞこへさかさまにゐたをす。〔弓  
流〕二七七頁六行)

よつびいてひやうどはなつ。四町余をつつとゐわたして、大舟  
のへにたつたる仁井の紀四郎親清がまつたゝなかを、ひやうふ  
つとゐて、ふなぞこへさかさまにゐたうす。〔遠矢〕二九一頁  
八行)

ひまつさきにす、んだる旗さしがしや頸のほねを、ひやうふつ  
といて、馬よりさかさまにいをとす。(卷九「知章最期」一  
七八頁二行)

ひ屋代本

シヤ頸ノ骨ヲヒヤウツト被レ射テ、舞倒レニゾシタリケル。  
(二二八頁三行)

遠矢イテ、思事ナク大船ノ舳ニ立タル新居紀四郎ガ裏甲ト、  
アナタヘツト射出サレテ、船底ニゾ倒ケル。(二四二頁七  
行)

④この人おや子は、さもし給はぬうへ、なまじみにくつきやうの

水練にておはしければ、しづみもやり給はず。大臣殿は、右衛  
門督しづまば、われもしづまん、たすかり給はゞ、われもたす  
からむとおもひ給ふ。右衛門督も、ち、しづみ給はゞ、われも  
しづまん、たすかり給はゞ、我もたすからんとおもひて、たが  
ひに目を見かはして、およぎありき給ふ程に、………〔能登  
殿最期〕二九七頁九・一〇行)

ひ屋代本

大臣殿ハ、右衛門督シヅマバ我モ沈ト被レ思ケリ。又右衛  
門督ハ、大臣殿沈給ハ、共ニシヅマント思テ、二人ノ人々  
ノ良久ク浪ノ上ニ浮ビテ御坐ケルヲ………

⑤平家これをほいなしとおもひけん、楯ついて一人、弓もつて  
一人、長刀もつて一人、武者三人なぎさにあがり、楯をつい  
て、「かたきよせよ」とぞまねひたる。判官「あれ、馬づよな  
らん若党どもはせてけちらせ」との給へば、〔弓流〕二七七頁  
一〇行)

平家これに心地なをして、「悪七兵衛うたすな。つゞけや物共」  
とて、又二百余人なぎさにあがり、楯をめん鳥羽につきならべ  
て、「かたきよせよ」とぞまねひたる。判官これを見て、「やす  
からぬ事なり」とて、………〔弓流〕二七九頁一行)

ひ屋代本

平家はヲ無ニ本意トヤ思ケム、小船一艘渚ヘ寄ス。船ノ  
内ヨリ長刀持タル者一人、楯築テ一人、弓持テ一人、三人

汀へアガテ、「源氏ノ方ニ、我ト思ハン者ハ寄ヨヤ」トゾ  
招タル。(二二八頁五行)

判官是ヲ見給テ、「悪七兵衛ナラバ漏スナ。射取レヤ」ト  
テ、喚テ懸給フ。三百騎連テカク。平家方ニモ見レ之、  
「悪七兵衛討スナ」トテ、小船百艘計渚へ寄ス。

⑥さも候へ、扇をばゐさせらるべうや候らん」と申。「みつべき  
仁は、みかたに誰かある」との給へば、「上手どもいくらも候  
なかに、下野国の住人、那須太郎資高が子に、与一宗高こそ、  
小兵で候へども、手き、で候へ。」(那須与一)二七四頁一  
行)

判官、後藤兵衛実基をめして、「この矢あつべきもの、みかた  
にたれかある」との給へば、「甲斐源氏に阿佐里与一殿こそ勢  
兵にてまし〜候へ。」(遠矢)二九〇頁一六行)

cf 屋代本

急ギ扇ヲバ射サセラルベウヤ候覽」ト申ス。「可レ射者ハ  
無ヒカ」。「何ドカ候ハザルベキ。強弓精兵イクラモ候へ共、  
先下野国住人……………(二二二頁八行)

「此ノ矢射返シツベキ者ハ無力」ト宣へバ、後藤兵衛、  
「ナドカ候ハザルベキ。甲斐源氏ニ、アサリノ余一殿コソ  
御坐ラメ」ト申ス。(二四二頁二行)

⑦まづ東にむかはせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其  
後西方浄土の来迎にあづからむとおぼしめし、西にむかはせ給

『平家物語』のへかたり』表現ノート(村上)

ひて、御念仏さぶらふべし。(「先帝身投」の二位の尼の言葉、  
二九四頁一四行)

御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふ  
しおがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかは  
せ給ひて、御念仏ありしかば、「先帝身投」の安德帝の行動、  
二九五頁三行)

cf 屋代本

アキレサセ給ヘル御様ニテ、「此ニ又何チヘソヤ、尼ゼ」  
ト仰ラレケル御詞ノ未ダレ終ニ、二位殿、「是ハ西方浄土  
へ」トテ、海ニゾ沈ミ給ケル。(二四八頁一行。高野本に  
該当する部分なし)

★屋代本(①は高野本①のcfとして掲出)

①「阿波民部嫡子田内左衛門範義、三千騎ニテ河野ヲ攻ニ伊与国  
へ越テ候。其外勢ノ向ハヌ浦々モ候ハズ。五十騎百騎ツ、被ニ  
差向ニテ候。」……………(一九八頁三行)

阿波民部ガ嫡子田内左衛門、河野ヲ責ニ伊与国へ越タリケルガ、  
河野ヲバ討漏シ、家子郎等百余人ガ頸ヲ取テ、我身ハ伊与ニ在  
ナガラ、先立テ屋島へ奉リタリケルヲ、……………(二〇二頁三行)

「阿波民部ガ嫡子田内左衛門教能、河野ヲ攻ニ伊与国へ越タン  
ナルガ、此ニ軍有ト聞テ、今日ハ定テ馳向覽。……………(二二六  
頁二行)

cf 高野本①、百廿句本①

②判官宣ヒケルハ、「アハヤ、我等ガ儲ハシテムゲルハ。船共平付ニ着テ敵ノ的ニ射サスナ。渚近フナラバ、馬共海へ追入、轆ニ引付く遊セテ、馬足立程ニナラバ、打乗テ懸ヨ」トテ、渚三町計ニ成ケレバ、轆踏ミ傾ケテ、馬共海へ追入、轆ニ引付く遊セテ、馬足立程ニ成シカバ、ヒタクト打乗く喚テカク。

(二九六頁二・四行、百廿句本(二二六頁)類似)

cf 高野本

判官これを見て、「あはや我等がまうけはしたりけるは。舟ひらづけにつけ、ふみかたぶけて馬おろさむとせば、かたきの的になつてゐられなんす。なぎさにつかぬさきに、馬どもおひおろしおひおろし、舟にひきつけひきつけおよがせよ。馬の足だち鞍づめひたる程にならば、ひたくとのつてかけよ。物共」とぞ下知せられける。五艘の舟に物の具入れ、兵糧米つんだりければ、馬たゞ五十余疋ぞたてたりける。なぎさちかくなりしかば、ひたくとうちのつておめいてかくれば、(「勝浦」二六四頁)

③和田小太郎扇ヲ揚テ、「其矢此方へ返給ハラン」トゾ招タル。新中納言此矢ヲ召寄テ見給へバ、白籠ニ鶴羽矯タル矢ノ、十三束三伏有ケルガ、沓巻ヨリ上ミ一束置テ、三浦和田小太郎義守ト、漆ヲモツテゾ書ヒタリケル。(二四〇頁三行)

平家ノ方ヨリ又、判官ノ船ニ大矢ヲ一射立テ、「其矢此方へ給ハラン」トゾ招タル。判官此矢ヲ召寄テ見給へバ、白籠ニ鶴ノ

本白矯タル矢ノ、十四束有ケルニ、只今書タリト覚ヘテ、伊与国住人新居紀四郎親家トゾ書タリケル。(二四〇頁一二行) cf 百廿句本③

cf 高野本

そのなかにことにとをうゐたるとおほしきを、「その矢給はらん」とぞまねひたる。新中納言これをめしよせて見給へば、しらのに鶴のもとしろ、こうの羽をわりあはせてはいだる矢の、十三ぞくふたつぶせあるに、くつまきより一足ばかりそいで、「和田小太郎義盛」と、うるしにてぞかきつけたる。(「遠矢」二八九頁)

又判官ののり給へる舟に、奥よりしらの、おほ矢をひとつゐたて、和田がやうに、「こなたへ給はらん」とぞまねいたる。判官これをぬかせて見給へば、しらのに山どりの尾をもつてはいだりける矢の、十四ぞく三ぶせあるに、「伊与国住人仁井紀四郎親清」とぞかきつけたる。(二九〇頁)

④「今日ハ日暮ヌ。勝負決セジ。明日ノ軍」ト定テ、源氏引退ントスル処ニ、奥ノ方ヨリ莊リ尋常ニシタル小船一艘渚ニヨス。(二二二頁三行)

「今日ハ日暮ヌ。勝負決セジ。明日ノ軍」ト定テ、源氏引退キ、当国ノ内、牟礼、高松ニ陣ヲ取。(二二二頁一〇行) cf 百廿句本④



cf 高野本

「けふは日くれぬ、勝負を決すべからず」とて、引退く処に、おきの方より尋常にかざったる少舟一艘、みぎはへむいてこぎよせけり。(二七四頁)

さる程に、日くれれば、ひきしりぞひて、むれ・高松のなかなる野山に陣をぞとったりける。(二八〇頁)

⑤真前二進ミタルハ大將軍ト見タリ。赤地錦直垂ニ、紅襦紺鎧着テ、金作ノ太刀ヲ佩、切文矢負、塗籠藤弓ノ真中取テ、黒馬ノ大逞キニ金覆輪鞍置テゾ乗タリケル。(二〇四頁二行)

一谷鶴超乗テ被レ落タリシ秘藏ノ馬ヲ、此僧ニゾ引レケル。黒キ馬ノ大逞ニ、金覆輪鞍ヲ被レ置タル。(二一〇頁九行)

能登前司ハ矢種皆射尽シ、今ハ最後ト被レ思ケレバ、赤地錦直垂ニ黒糸威鎧着テ、源氏ノ船ニ乗移リ、白柄大長刀茎短カニ取テ難給ニ、……………(二五四頁二行)

二重線部ニツイテハcf百廿句本⑤

cf 高野本

九郎大夫判官、其日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫すそこの鎧着て、こがねづくりの太刀をはき、きりふの矢をひ、しげどうの弓のまなかとつて、舟のかたをにらまへ、……………(二六九頁。馬ノコトハ無イ)

黒き馬のふとうたくましるに、きぶくりんの鞍おいて、かの僧にたびにけり。(二七三頁)

『平家物語』の「かたり」表現ノート(村上)

凡そ能登守教経の矢さきにまはる物こそなかりけれ。矢だねの有程みつくして、けふを最後と思はれけむ、赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧着て、いかものづくりの太刀ぬき、しら柄の大長刀のさやをばづし、左右に持つてなごまはり給ふに、……………(二九八頁)

⑥十六日ノ丑刻ニ渡部福島ヲ出テ、推ニハ三日ニ渡所ヲ、只三時ニ、明レバ十七日卯刻ニ阿波ノ勝浦ニ付ニケリ。(一九四頁八行)

渡部ヨリ三日ニ渡処ヲ、只三時ニ渡リタレバ、其夜ハ大浪ニユラレテ打臥サズ。(二二二頁一一行) cf 百廿句本②

cf 高野本

夜もすがらはしる程に、三日にわたる処を、ただ三時ばかりにわたりけり。二月十六日の丑刻に、渡辺福島をいで、あくる卯の時に、阿波の地へこそふきつけたれ。(二六三頁)

おと、ひ渡部福島をいづるとて、其夜大浪にゆられてまどろまず。(二八〇頁)

⑦判官涙ヲ流シ給テ、「此ノ世ニ思置事アラバ、只今義経ニ云置ケ」ト宣ヘバ、次信ヨニモ苦シゲニテ、「ナドカ此世ニ思置ク事ナウテハ候ベキ。先奥州ニ留置候シ老母ヲ今一度見候ハヌ事……………(二一〇頁二・三行) 百廿句本類似

cf 高野本

「おもひをく事はなきか」との給へば、「なに事をおもひをき候べき。君の御世にわたらせ給はんを見まいらせて死に候はん事こそ、口惜覚候へ。……………(二七二頁)

⑧去程ニ源平乱合テ、喚叫テ戦フ。能登前司宣ケルハ、「船軍ハ様有物ゾ」トテ、……………(二〇八頁一行)

サル程ニ、源平乱合テ数刻戦ニ、白雲一村源氏ノ船ノ陣ノ上聳テ見ケルガ、……………(二四二頁九行)

cf高野本

能登守教経、「ふないくさは様ある物ぞ」とて、……………

(二七一頁、屋代本該当部分ナシ)

其後、源平たがひに命を、しまず、おめきさけんでせめた、かふ。いづれおとれりとも見えず。(二九一頁、「おめきさけんでせめた、かふ」ハ高野本卷十一前半二四箇所アリ)

⑨アハヤ、敵ノ既ニ寄候ゾヤ」ト申程コソ有ケレ、白幡ザット差揚タリ。「アハヤ源氏ヨ。定テ大勢ニテゾ候覽。急ギ……………(二〇二頁六行)

如レ案内内左衛門、屋島二軍有ト聞テ馳參ル路ニテ、義守二行合タリ。白幡ザット差挙タリ。「アハヤ源氏ヨ」トテ、赤旗差挙タリ。(二二六頁八行)

cf高野本、両方トモ該当文ナシ。

⑩追テ薙ンズルカト見レバ、サハ無テ、長刀取直シ左ノ脇ニカヒ

挟ミ、右ノ手ヲ以テ逃ル敵ガ甲ヲ摑ントス。(二二〇頁二行)

敵モ臆テ追テハコデ、長刀左ノ脇ニカヒ挟ミ、右ノ手ニテ引切タル甲ノ蒂(シコロ)ヲ差挙テ、(二二〇頁五行)

cf高野本

長刀でながんずるかとみる処に、さはなくして、長刀をば

左の脇にかいはさみ、右の手をさしのべて、みをの屋の十

郎が甲のしころをつかまんとす。(二七八頁)

かたきはおうてもこで、長刀杖につき、甲のしころをさし

あげ(二七八頁)

★百廿句本

①「などすくなきぞ」との給へば、「あわのみんなぶがちやくし、でんないざへものりよし、三千よきにてかわのをせめに、いよの国へわたつて候。それ、せいのみかはぬうらくも候はず。……………(「屋島」二二七頁一四行)

平家はうんやつきぬらん、大ぜいとこそ見てんげれ。あわのみんなぶがちやくし、でんないざゑもん、かわ野をせめにいよの国にこえたりけるが、かわ野はうちもらし、いゑのこらうどう百よ人がくびをとり、わが身はいよにありながら、さきだてやし

まへ奉りたりけるを……………(「屋島」二二〇頁一〇行)

はうぐはん伊勢の三郎よしもりをめして、「あわのみんなぶなりよしがちやくし、でんないざへものりよし、かわのをせめにいよの国へこへたんなるが、これにいくさありとき、て、けふ

はさだめてはせむかふらん。(「讒言梶原」二三五頁二行)

②うしのこくにわたななべふく嶋をいで、おすには三日にわたる所を、たゞ三ときに、十七日のうしのこくに、あわのかつらにつきにけり。(「屋島」二一六頁一行)

わたななべより三日にわたる所を、たゞ三ときにわたりければ、その夜は大浪にゆられていねず。(「扇的」二三四頁一行)

③わだのこ太郎あふぎをあげて、「その矢こなたへかへしたばん」とぞまねきける。しん中なごんこの矢をめしよせて見給へば、しらのにこうのはにてはあだる矢の、十三ぞく三つぶせありけるが、くつまきのうへ一そくおきて、「三うらのわだのこ太郎よしもり」と、うるしをもつてかきたりけり。いよの国のぢう人に、ゐの木の四郎ちかいゑをめて、「此矢いかへせ」との給へば、ちかいゑいぎも申さず、わがゆみにとつてつがひ、……(「壇の浦」二四四頁七行)

平家のかたより、またはうぐはんの船に大矢を一ついたて、「その矢こなたへたばん」とぞまねきける。めしよせて見給へば、しらのにつるのもとじろにてはひだるやの、十四そくありけるに、たゞいまかきたるとおぼえて、「いよの国のぢう人に、ゐの木四郎ちかいゑ」とぞかひたりける。ごとう兵衛さねもとをめて、「此矢いかへしつべきものはなきか」との給へば、「などかは候わざるべき。かひげんじの中に、あさりの与市殿こそおはすらめ。」さらば」とてめされけり。与市小ぶねにの

『平家物語』の(かたり)表現ノート(村上)

りていできたる。「いかにあさりどの、この矢いかへせ」との給へば、(「壇の浦」二四五頁二行)

④「けふは日くれぬ。しうぶはけつせじ。あすのいくさ」とさだめて、源氏ひきしりぞかんとするところに、おきのかたよりじんじやうにかざりたるせうせん一そうなぎさによす。(「扇的」二二六頁九行)

「けふはくれぬ。あすのいくさ」とさだめて、源氏ひきしりぞき、たうごくむれ・たか松にぢんをとる。(「扇的」二二三頁一三行)

⑤まつさきにす、んだるぞ、大しやうとは見えたる。あかぢのにしきのひた、れに、むらさきすそごのよろひきて、こがねづくりの太刀はき、きりもんの矢をひ、ぬりごめどうの弓のまんなかとつて、くろのむまのふとふたくましきに、きんぶくりんのくらおひてぞのつたりける。(「屋島」二二二頁一行)

「いまはつる物のふがために、きやうをかきとぶらふてたび候へ」とて、ひさうのむまをぞひかれける。くろき馬のふとくたくましきに、きんぶくりんのくらおひたり。此むまと申は、……(「屋島」二二五頁一四行)

のとのぜんじのりつねは、矢だねつき、「いまはさいご」とおもはれければ、あかぢのにしきのひた、れに、ひおどしのよろひきて、源氏の船にのりうつり、しらえのなぎなた、くきみじかにとつてなぎ給へば、……(「早鞆」二二五頁六行)

高野本①は非常に長い同文である。特に第二と第三は、第一の後半に二重傍線部の同文を継ぎ足して複写的に作ったとさえ言えるほどである。延慶本では第三の部分に二重傍線部の同文は見られない。かつ、第三の場では二重傍線部は文脈上過剰の情報だといえる。覚一本系で様式的な整備がされたのではないだろうか。④に見られる待遇表現の乱れ(新大系で指摘がある)もそのことを疑わせる。そして、それが純粹にオーラルな作業の結果生成されたとは、その長さで複雑さからは考えにくい。

しかし、屋代本と百二十句本の第三の同文にも不審が残る。義経の命を受けた伊勢三郎が十六騎で田内左衛門を誘こらえに出発する際、兵共が「三千騎が大將軍ヲ白装束十六騎ニテ向ヒ、生虜ニセン事難レ有」と笑うのが文脈上唐突になる。三千騎の情報は、最初の同文に点線を付した相違部分にしかなく、それが義経勢にもたらされた記事はない。そして享受者が「くちがたり」によって得た情報を距離をおいたここまで記憶している可能性は低い。延慶本のこの部分には「三千余騎ニテ伊与国へ押渡テ、河野ヲ責ニ寄ケルト聞」とあり、屋代本や百二十句本(ないしはそれらの共通原型)の第二と第三の同文にも様式的な整備の痕跡を見るべきかもしれない。そして、覚一本系本文を屋代本等の原型より後出(逆は文脈上考えにくい)だとすれば、同本が様式的な情報過剰の同文を持ちこんだ引金を、屋代本等の文脈破綻に求めることもできようか。臆測はともあれ、屋代本の伊与国へ「越テ候」と「越タリケルガ」と「越タンナルガ」

という文末の陳述の差異は、高野本第二第三の「まいらせたり」「まいらせたりけるが、けふ是へつくとときく」の表現のものもしさ野暮ったさに通じる正面性Ⅱに比して軽妙で洗練されている。それをも含めて、屋代本らの原型の本文形成の技術評価については「原始的」とか「未熟」「素朴」など以外の視座を持ちこむこともときには必要ではないだろうか。

右を前提にして、屋代本で注目されるのは、②③⑦⑩に見られる同文である。これらでは同文が間を置かず、しかも⑦の判官の詞みを変えるなどの変化を伴って繰り返されている。これらは本論文第一章でとりあげた「皆紅ノ扇ノ日出シタル」とは異なる技法である。記憶浮上よりは反芻、確認と漸層効果。日本のいわゆる「かたりのもの」の表現として普遍的な技法である(これを素朴なものと呼ぶするのは研究者の自由ではある)。語り本平家物語テキストにも高野本⑤や、「あそこの峯こ、の洞より十四五騎廿騎うちつれうちつれまいりければ」(高野本二七三頁、「那須与一」冒頭)のような漸層表現(特に同語反復に特徴がある)が多用され、なかならず覚一本系で量的増加が見られる。ところが、比較すべく掲出した本文で知られるように、高野本(覚一本系本文といってもよい)では②③⑦⑩では全て同文表現が解消させられている。これは延慶本など(読み本)の持つ視覚的享受の方法の取入れによる「不純化」された「語り」表現の方法と見るべきであろう。高野本には屋代本④⑤

(二重傍線部) ⑧⑨、高野本⑥に比較資料として掲げた屋代本本文などが持つ表現の型とは別の表現の型を持っている。屋代本⑤に比較資料として掲げた高野本の二重傍線部の増加、高野本③のような定型表現、④のような累層性を帯びた繰り返し。その内屋代本④⑨の比較資料として掲出した高野本や、同本などで屋代本に比して会話部分が頼れ、消去されているのが注目される。それらを屋代本と比較して増減や有無という次元にとどめて平面化せず、その質的差異を分析せねばならない。そのためには、もっとデータが必要である。(未完)

## 注

- 一 新日本古典文学大系『平家物語』下二七六頁。ただし表記は原本に戻し、促音は小書で補った。以下本文中の頁付けは新大系による。
- 二 『屋代本高野本対照平家物語』下二一六頁。ただし濁点は私に補った。(以下引用原文に濁点のないときは私に濁点を付加する) 以下本文中の頁付けはこの本による。
- 三 古典文庫『平家物語』第六冊三三三頁。新潮日本古典集成下巻二三〇頁該当。以下本文中の頁付けは『集成』による。
- 四 未刊国文資料『中院本平家物語と研究』第四冊八二頁該当。
- 五 高山利弘編著『訓読四部合戦状平家物語』三九五頁。
- 六 勉誠社刊本の下巻三八四〜三八六頁。
- 七 これについては左の拙稿を記した。

「幸若舞曲の統辞法へのアプローチ続稿」(『幸若舞曲研究』第六卷、平成二年)

「かたり」の序説——戦略的に——(『平家物語と語り』平成

『平家物語』の「かたり」表現ノート(村上)

四年)

『平家物語』の「語り」性についての覚書(『平家物語 説話と語り』有精堂、平成六年)

八 「語り本『平家物語』の統辞法の一面」(中世文学第三十五号、平成二年六月)。

九 座談会「平家物語の今日から明日へ」(国文学、平成七年四月) 三九頁の松尾葦江氏の発言。

なお、右の座談会に先行的に対立するものとして山下宏明「合戦語りと物語」(日本文学、平成二年六月)がある。